

あおい通信 第101号

日本の世界遺産めぐり

その一 法隆寺

現代を生きる人類共通の宝物。世界遺産は三種類に大別されます。「文化遺産」・「自然遺産」・「複合遺産」。

皆様に御承知おきの歴史物語ですが、改めて振り返ってみましょう。

法隆寺の歴史

法隆寺は聖徳太子が父・用明天皇のために六〇七年（推古一五年）に建立したといわれる。「日本書紀」によると、その寺は六七〇年（天智九年）落雷による火災で焼失したと思われる。現在の南大門の東のそ

の寺跡を若草伽藍と呼び礎石がおかれている。現在の法隆寺の金堂や東室の礎石、石垣の一部にも若草伽藍が使われている。

古い寺の伽藍配置は塔と金堂が南北一直線に並び四天王寺式であった。古い法隆寺が焼失後、再建されたのが現在の西院伽藍である。

まず金堂が建ち、七一一年（和銅四年）には五重塔と中門も完成したといわれる。その後鐘楼・経蔵・講堂・僧坊・西円堂等、次々と建てられ、

平安末期には現在の西院の形が整った。又、行信により太子を偲んで七三九年（天平十一年）、斑鳩宮跡に、建立された上宮王夢殿は東院とよばれ、太子信仰のメッカとなった。平安末期から鎌倉時代にかけて特に太子信仰が高まり寺は繁栄した。その後衰退・復興を重ねながらも慶長大修理・元禄大修理・昭和の大修理を経て法隆寺は一九九三年十二月に日本最初のユネスコ世界文化遺産に登録された。

西院の金堂・五重塔・中門ならびに回廊は七世紀末から八世紀初めにかけて、造られた現存世界最古の木造建築物であり

飛鳥時代の秀れた建築技術を今日に伝えている。現存する法隆寺西院伽藍は聖徳太子在世時のものでなく、七世紀末から八世紀初めの建立であることは定説となっており、この伽藍が建つ以前に焼失した前身寺院（いわゆる若草伽藍）が存在したことも発掘調査で確認されている。また聖徳太子の斑鳩宮跡とされる法隆寺東院の地下からも前身建築物の跡が検出されている。以上のことから、



法隆寺・西院伽藍

聖徳太子の实在、非实在によらず、七世紀の早い時期、斑鳩の地に仏教寺院が営まれたことは史実と認められている。

（資料PCウェブより）

世評・時評



今年のエイヤー、ヨーイヤナ

式年遷宮（しきねんせんぐう）伊勢市は二十一年に一度の式年遷宮で日本中からお伊勢参りの人が詰めかけました。

二十年ぶりの伊勢は、昔とちつとも変らぬ佇まいで、私たちを迎えてくれました。「一之木町・須原団」などと染め抜か

れた揃いの法被を着て晴れ晴れした顔の善男善女で町はあふれ返りました。八月三十日は「白石持ち（しらいしもち）」の当日。

樽に詰められた新しい白石を、新しく建てかえられた社殿の下に丁寧に敷きつめるといふ行事です。白石を積んだ車を大勢で

引いて練り歩きます。「えいやー」「よいいやな」などと掛け声をかけながら、綱を引いた人を中心に静かに、時に激しく伊勢の街中を引き回します。

沿道には「お白石持ち」の幟が立ち並び、街は遷宮一色に塗りつぶされます。

この日だけは、内宮・外宮の神殿に直に近付ける、二十一年に一度の晴れの日なのです。一之木町の人々にとって待っていた日。伊勢詣での人にとっても、かけがえのない日なのです。文・写真 井関義久

雑記帳

編集雑記

大塚芳男

今号より編集長の大役を仰せつかりました。長年継続中の、この通信をどのようにして維持してゆこうかと、役を受諾してから様々想いを巡らせてきました。自己診断の結果、能力に応じた方向性を考え、等身大で背伸びや無理をせず、偏見は棄て、コツコツ実績を重ねる事を肝に命じ努力をするつもりです。誠に僭越ですが、通信の今後の方向性を述

べておきたおと思います。※既存のスタイルを否定する考えはありませんが、今後、長年通信を維持継続するには「革新」も重要な要素ではないかと考えます。新企画の各項に、皆さんがより沢山の興味を抱き、そして喜んでもらえる記事を考えておきます。

※通信と利用者各位の距離感を縮めたいの思いで会社側の活動方針等々その他、告知情報を積極的に掲載して広報活動に協力したいと思っております。「デイサービス葵」で検索、ホームページ参照（詳細掲載）

◆編集委員会より「あおい通信」は、皆様からの原稿を募集しています。係員・飯島まで

葵友の会 広報コーナー

9月度行事の結果

池袋サンシャイン水族館 18日（水）22名の参加、童心に帰り、絶景の美食を堪能。カラオケ会

20日（金）バンバンにて、12名の参加。

10月度行事の予定

カラオケ会 11日（金）バンバンにて。

鎌倉日帰り旅行 元湘南ボーイが案内する葉山と鎌倉の穴場を訪ねます。（事務局長）

利用者さんの紹介コーナー

米澤 道朗(金)

趣味は写真でした。国内の旅行をしたときに、風景を撮っていました。八人兄弟でしたが、今は三人だけになってしまいました。少し寂しいですが、私はがんばって、もうちょっと長生きしてみたいと思っています。

今は週に一回の葵の通所を楽しみにしています。



小野寺 ヒトエ(水)

今の趣味はカラオケです。月二回の仲間の集まりで歌っています。昔は「アメリカンフラワー」をやっていました。

ワイヤーを曲げたり、ねじったりして、花びらや葉っぱを形作って、それを特殊な液で色を作っています。クリスタルの様な輝きを持つ、究極ともいえる造花です。葵ではいろいろとやることがあり、週一回の楽しみになっています。



島田 江(土)

和裁、洋裁、編み物をやっています。和裁は人に教えたり、呉服屋さんからの注文で縫ったりもしていました。旅行(温泉めぐり)、山登りも好きでした。ヨガもやっていました。



山田 登美子(火)

大阪万博の年、私が四十歳から七十五歳までお店をやっていました。輸入品の、食料品、貴金属などを扱っていました。元気がときは俳句、カラオケ、水泳をやっていました。今は、動ける範囲で運動しています。



江連 房枝(火、木)

カラオケが好きでしたが、今はなかなか行くことができません。葵に来るのは、マシンのすることが目的であり、楽しみです。雰囲気もとてもいいです。



葵は宝の山

吉富多寿男

「葵は宝の山」と私は思っています。

たゞ、その埋もれた宝をどうやって発掘し、自分のものにするかがポイントだと思えます。初めて私が葵を訪れたのは2009年の7月ですから、もう4年以上経ちました。今回はその4年間に得た私の「宝」のお話をしたと思います。

今日、現在私達の回りには沢山の情報が流れています。その大部分が自分の側を通りぬけてしまっています。政治、経済、文化、国際、等々の情報がTV、ラジオ、新聞、雑誌を通じ、とてつもなく大量に休みなく流されています。この流れの情報から、自分にとって大切な情報を選び出してゆくのですが、最近私が葵で得たものを報告します。

①その一つは、葵が購読している週刊新潮の中の、藤原義彦氏の「管見妄語」です。同氏は数学者、エッセイスト、父は作家新田次郎、母は、ベストセラー「流れる星は生きていく」を著し、苦難の帰国を果たした人です。長男の義彦氏は「国家の品格」他を著しておられます。

最近の「管見妄語」に「おしゃべりの6人ルール」が書かれておりまし

おやすみソング

作詞・高橋カツ

ママの瞳の中で

一、ねむれよ坊や(良い子) 今日も一日ありがどう今あなたかき此のママの瞳の中ですやすやすと

二、ねむれよ坊や(良い子) 春の野に翔ぶタンポポの綿毛のように此のママの瞳の中で夢乗せて

三、ねむれよ坊や(良い子) 明日も亦々すばらしい日であるように此のママの瞳の中ですやすやすと

宮本武蔵

高橋カツ

幼い日、長兄が朝の食後のひとときに、面白く読んでくれた宮本武蔵、地方誌の下段小説記載で、それぞれの人物の声音で読んでくれた、なつかしい思い出

ある日ある時銀座のデパートで武蔵展を観る、武蔵のみで無く彫刻、書画にと今に遺る数々の品々、巖流島以後、歳老いて尚も洞窟にこもり、五輪書を記すと言う。白髪断髪、後姿の武蔵像に、私は飛びのく程の緊張を覚えた、殺気と言うか、何と言うか、只の好々爺ではないその後姿の像に、満腔の敬意を表し、やっぱり武蔵は実感として、今も私の心の中に生きていた。



ドライバー 川口千里

自画像



静岡県三島市にて料理を営む父母の元、男三兄弟の次男として生まれしました。幼少のころよりヤンチャで親を手こずらせました。父が病気がちになり大学を中退し、家業に従事しましたが父が他界し、商売も上手くいかず廃業。上京しました。社長、役員専属の運転手として従事し定年を機に退職しました。子供達も独立しているので、これからはのんびりしようかと思っていました。そんな生活に退屈し、葵で働く事にしました。今までの社長等に教わった事を思いだして利用者様に喜ばれ安心して乗車してもらえらる運動を、心がけたいと思っています。過去には色々趣味はありましたが、現在は野球観戦、競馬ぐらいです。

あおい歌壇・俳壇

忘れ物してきたよつな 気がします

もつ戻らない、あの夏の日こ

人々の平和を願う 日となれや

命尊し八月一五日 忘れまい

消されゆく戦いの日々 忘れまい

今この平和を噛み締めつつ

河西千恵子

明けやらぬ 静寂の間 禅寺の

濁流は 渦を巻きつつ 僧走り行く

川面をたたき 雨降りしきる

過ぎ去りし 幼き頃の思い出は

齢と共に心にしみる

吉野波な

書下がり 桜並木に 蝉しぐれ

主と見る 天の川なる 夕べかな

麻生伊登子

相田美代子

ラベンダー

選挙かな

富寿郎